

「リンパ節における環境細胞を標的としたゲノム解析」について

1. 研究の対象

筑波大学附属病院にて胃癌、大腸癌、肝臓癌、胆嚢癌、膵臓癌と診断され手術を受けられる患者様で、「診療で採取した組織、血液をつくばヒト組織バイオバンクセンターで保管することについてのお願い」（2016年9月～2023年4月30日）、及び「筑波大学附属病院で診療を受けられる患者さんへ」（2016年9月以前）にご同意くださった方のうち、手術において治療を目的に切除されたリンパ節が正常リンパ節と判断された患者様。

2. 研究目的・方法

いわゆる「がん組織」には、がん細胞だけでなく、血管や炎症細胞などの環境細胞からなる「微小環境」が構築され、この微小環境ががん細胞の増殖や生存に関わっていることが分かってきています。このうち、一部の血管細胞には染色体変異がみられることが分かっています。また、炎症細胞は造血前駆細胞（血液細胞を生み出す細胞）に由来しています。造血前駆細胞には加齢に伴って一定の確率で遺伝子変異が起こることが分かっています。これらのことから、造血前駆細胞に遺伝子変異を持つ患者さんのがん組織内には同じ遺伝子変異を持った血管細胞や炎症細胞が含まれており、がんの増殖に関与している可能性があるかと予想されます。同じがん細胞でも、がん細胞を囲む環境細胞に遺伝子変異があるかないか、またどんな遺伝子変異があるかによって、がんの性質や治療に対する反応が異なる可能性があるかと推測されます。

今回筑波大学血液内科では主に悪性リンパ腫におけるリンパ節の組織に含まれる環境細胞の遺伝子異常の分布と治療の効果の関係を調べます。その上で比較対象となる正常なリンパ節の環境細胞の解析が必要となるため、診断や治療のためには不要である余りの正常なリンパ節を解析させていただきます。消化器癌に対して、転移を想定したリンパ節の切除が治療の一環として一般的に行われますが、そのリンパ節のうち一部は転移の有無を調べるために検査に使用されますが、残りのものは基本的には用途がありません。この残余リンパ節のうちで肉眼的あるいは専用の検査でがんの転移がないと判断されたものを、正常リンパ節として遺伝子解析の対象とさせていただきます。その中に含まれている環境細胞を抽出して解析させていただきます。

※本研究で得られた遺伝子解析の結果は開示されません（結果の解釈が難しく、患者さんの利益になる情報が得られないためです）。

※本研究で得られた遺伝子情報は配慮すべき個人情報に該当します。ただし、本研究においては、遺伝子情報からただちに個人を特定できない体制をとっております。

※共同研究機関と責任者名は下記の通りです。

東京大学大学院 新領域創成科学研究科 鈴木 穰
亀田総合病院 血液腫瘍内科 末永 孝生
虎の門病院 血液内科 梶 大介

3. 研究期間

倫理審査委員会承認後～2026年3月31日まで

4. 研究に用いる試料・情報の種類

情報：病歴、治療歴、病理診断結果 等

試料：リンパ節の生材料あるいは凍結材料等

5. 試料・情報の管理について責任を有する者

筑波大学医学医療系血液内科 研究責任者 教授 千葉 滋

6. 本研究への参加を希望されない場合

患者さんやご家族が本研究への参加を希望されず、試料・情報の利用又は提供の停止を希望される場合は、下記の問い合わせ先へご連絡ください。すでに研究結果が公表されている場合など、ご希望に添えない場合もございます。

7. 問い合わせ連絡先

医学医療系血液内科 坂田麻実子 029-853-3127 (平日9～17時)